活動記録

①研究室の設置目的

ひょうご歴史研究室（以下、研究室と略す）は、平成二七年（二〇一五）四月、県民の郷土に対する愛着を深め、「ふるさと意識」に根ざしたひょうご文化の発展・継承をめざし、また県内各地の歴史の調査・研究を目的にして、兵庫県立歴史博物館内に開設された（設置要綱は175頁に掲載）。

②研究室メンバー

研究室メンバーは、博物館長が室長を、次長が副室長を兼務し、そのほか館内外の学芸員、資料館の職員、県内市町の文化財担当者、大学研究者、民間団体研究者などに、参与・研究員などとして協力を仰いで成り立っている。

このうち研究室の基本方針等を討議するコア会議メンバーには変動はなく、昨年度と同じく一三名で構成された。

大きく変わったのは、昨年度末、発展的に解消された『播磨国風土記』研究班に代わり、新たに「大阪湾岸と淡路の地域史研究班」を立ち上げたことである。

メンバーは八名からなり、このうち金田匡史（洲本市教育委員会）と定松佳重（南あわじ市教育委員会）の両氏が共同研究員として加わり、そのほかは、『播磨国風土記』研究班以来のメンバーである。

たたら製鉄研究班では、笠井今日子・小川弦太の両氏が退任し、新たに松井良祐氏（稲美町教育委員会）が加入した（総勢九名）。

赤松氏と山城研究班、および「「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトメンバーには変動がなく、それぞれ一二名、一〇名で構成された。

これらの全体を統括するのは、教育委員会事務局文化財課の甲斐昭光課長で、そのもとに本年度は二名の文化財課職員が、各班の補佐役を担当した（柏原正民副課長兼文化財班長と大本朋弥主任）。

また非常勤職員の研究コーディネーター（坂江渉）・歴史研究推進員（大村拓生）・県政推進員（長澤喜史）の各一名を配置し、現在、研究室は総勢四〇名で構成されている（174頁の「研究室構成メンバー一覧」を参照）。

③研究方針

開設初年度、研究の基本方針を討議するコア会議、全体会会議の開催を経て、研究室の当面の研究テーマを、

①『播磨国風土記』、
②赤松氏と山城、
③たたら製鉄、

の三つにすることが決められた。それを遂行するため、三つの研究班が編成された。

ただしこのうち『播磨国風土記』研究班は、前述のように令和三年度

末に解消し、本年度から大阪湾岸と淡路の地域史研究班を立ち上げた。

研究室では平成三〇（二〇一八）年度から研究の全体方針を掲げ、本年度は、「七年間の研究成果を踏まえ、基礎研究を継続するとともに、島根県古代文化センターと淡路島日本遺産委員会との連携を強化して、ひょうご地域史研究の発展を図る」と決めた。

④本年度の活動概略

本年度もコロナ禍にもとづき、残念ながら令和二年度（二〇二〇）以前のような活動を順調にすすめることができなかった。

第一に、各班のフィールド調査活動を抑えざるを得なかった。現地調査と資料調査の概要は、172頁の一覧を参照していただきたい。

第二に、研究室の連携組織である淡路島日本遺産委員会と島根県古代文化センターとの対面による合同事業を実施できなかった。

このうち淡路島日本遺産委員会との共催行事、ひょうご歴史研究室in淡路島Ⅳ（淡路市内で開催予定）は、三年連続中止に追い込まれた。唯一対面で開催できた県民向け企画は、令和四年一〇月一六日のひょうご歴史文化フォーラム「前期赤松氏の実像 ―城郭と寺院から―」だけであった（県立西播磨文化会館にて。事前応募者を中心にして合わせて一五七名が参加）。

第三に、コア会議と三つの研究班の研究会のすべては、対面とオンラインを組み合わせたハイブリッド形式でおこなわざるを得なかった。

現在本館が大規模改修中であるため、対面会場として県立考古博物館の体験学習室を借用して開催した（令和五年二月以降の各研究会は博物館内で開催予定）。県立考古博物館には、この場を借りて改めて御礼申し上げたい。

ただし調査期間の最終年度を迎えた「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトの研究会は、淡路県民局の会議室にて対面形式でおこなった。各調査委員には、コロナ禍のもとにもかかわらず、現地調査と資料調査に尽力していただいた（173頁参照）。

第四に、合わせて二回開かれたコア会議（令和四年五月八日、一二月一七日）では、厳しい財政事情も踏まえ、研究室の今後をどうするかについて討議した。

とくに一二月一七日のコア会議では、「あっという間の八年間だった。色々な研究成果があがったが、コロナ禍が実績アピールに悪い影響を与えた。これは誠に残念だった」「研究室の八年間の事業は、県と市町との交流促進という意味でたいへん意義があった。今の雰囲気では、二年先に廃止という空気になっているが、何とか存続する必要がある。ここで止めてしまうのは、余りにも勿体ない気がする」「研究室の成果と実績に

ついてもっと胸を張るべきだ。たとえば昨年度刊行された『播磨国風土記』の古代史』は、現在再版されている。この手の本で再版されることは滅多にないことだ。悲観的な見方をすべきではない」などの意見や感想が出された。

この会議での討議内容を踏まえ、今後さらなる議論を積み重ねていくことになった。

以下、三つの研究班と「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトの研究活動と成果を概略的に紹介する。

なお各班の研究会と調査活動、および「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトの調査・研究活動内容については、172～173頁の一覧表を参照のこと（本誌第七号に掲載できなかった昨年度の分も含む）。

一、大阪湾岸と淡路の地域史研究班

⑴体制と研究方針

昨年度末に解散した『播磨国風土記』研究班の六名と新加入の二名、合わせて八名のメンバーで研究班を立ち上げた。

第一回研究会で、「これまでの淡路島日本遺産委員会との連携成果を踏まえ、前近代の大阪湾岸、淡路島の地域史研究に取り組む。その成果を地域資源を活かしたまちづくり事業に反映させる。また前年度刊行の『播磨国風土記』の古代史』の研究成果の普及をめざす」という研究方針を決めた。

具体的には、①島根県古代文化センターと連携して、古代の海人（あま）の南北間交流の実態解明や生業の比較検討、②近世の「淡路分間絵図」の学術調査、③館蔵資料の『淡路名所図会（ずえ）』の刊行をめざす、という三つの内容をすすめることにした。本年度の研究成果は、以下のとおりである。

⑵研究成果の公表

①『播磨国風土記』の研究成果の普及をめざす博学連携企画

『播磨国風土記』の研究成果の普及については、できるだけ若い世代を対象とすることを決め、本年度はつぎのような二つの博学連携企画を実施した。

□姫路女学院高校との連携

毎日新聞社大阪事業本部企画部の安部拓輝記者からの紹介と、同氏とのやりとりを経て、姫路女学院高校主催のリベラルアーツ企画に講師（鈴木敬二館長補佐と坂江渉）を派遣し、ひょうごの地域史や『播磨国風土記』の最新研究成果を紹介した。

参加した生徒は二四名で、感想として、「播磨国風土記のなかにみられる「言葉遊び」の話が興味深かった」「歴史を深堀りするなら歴博へ」などの意見が出された。

□県立姫路東高校の書道部との連携

考古学系の博物館では、「土器作り」「勾玉作り」教室など、しばしば体験学習型企画が催されている。これと似通ったものを当館でもできないかという意図のもと、『播磨国風土記』の餝磨（しかま）郡条の神話・伝承を同校書道部生徒に筆写してもらい、その内容を「競書」（コンクール形式）するプロジェクトを本年度七月頃に立案した。

神戸大学名誉教授の魚住和晃氏を「書」の監修者として協力を仰ぎ、令和四年一二月二三日、「播磨国風土記を書にする」というテーマで、魚住氏と坂江がゲストスピーカー授業をおこなった（生徒一一名、担当教師四名が参加。当館からは魚住・坂江のほか、前田和彦指導主事が参加した。二月八日にも補習授業）。

授業のなかで魚住氏は、「臨書」と「創作書」によるサンプルを提示し、書の内容や言葉の意味を理解したうえで筆写することの重要性を力説した。

回収したアンケート用紙によると、「漢字のなかに異体字というものがあることを初めて知った」「自分が住んでいる土地の地名の由来話を書道で書くのが楽しみだ」「臨書する際、ただ文字を写すだけでなく、意味を汲みとることの重要性が分かった」「今回僕たちが書く時に注目される部分が「言語」だと言われたのが印象的だった。今までは単に臨書することがメインだったので、新たな視点でワクワクする」などの感想が寄せられた。こちらが意図する点が、生徒にもかなり伝わったと感じられた。

②「ふるさとの歴史講座神戸校」の歴史講座への協力

元副室長の豊田幸雄氏の紹介で、令和二年度から始まった公益財団法人・兵庫県芸術文化協会の「兵庫県生活文化大学」の歴史講座の開催に、本年度も研究室が共催団体として協力した。

テーマを「『風土記』からみる古代の歴史」として、現在のところ合わせて九回の講演会を実施し（171頁のチラシ参照）、延べ人数で三三五名の市民が参加している。本講座も『『播磨国風土記』の古代史』の研究成果

の普及事業の一環をなすことはいうまでもない。

③「パーマーさんが読み解く播磨国風土記」の新聞連載への協力

神戸新聞の姫路本社、上杉順子記者に依頼して、海外における『播磨国風土記』研究の第一人者、日本文学研究者のエドウィーナ・パーマー氏の研究成果を、『神戸新聞』に掲載することを申し出た。

パーマー氏は、「隠れた掛け言葉」「逆さ読み」など、『風土記』から読み解ける口承文芸について四回に分けて寄稿し（令和四年八月下旬『神戸新聞』姫路版）、当班がその翻訳作業をバックアップした。後日その記事の内容が、同紙の「正平調」に紹介されるなど、きわめて好評だった。

④『神戸新聞』「見る思う」欄への寄稿

旧知の新聞記者の依頼を受け、坂江が令和一〇月一六日付けの同紙「見る思う」欄に、「「播磨国風土記」の魅力と古代神話」と題する一文を寄稿した。

⑤うれしの友の会での特別講演

うれしの友の会の依頼を受け、令和四年五月三一日、坂江が同会の歴史講座（特別講演）において、「『播磨国風土記』の魅力　―神話と伝承から探る―」と題する講演をおこなった（兵庫県立嬉野台生涯教育センターにて）。

二、赤松氏と山城研究班

⑴体制と研究方針

体制は昨年度と同じく総勢一二名で構成し、調査研究に着手した。

本年度はとくに調査研究の区切りにする年と位置づけ、研究方針を「これまでの「赤松館」と城山城の調査・研究の成果を踏まえ、前期赤松氏の拠点形成について総括し、その情報発信をめざす」と決めた。研究会は現在のところ合わせて二回開き、令和五年二月中に三回目の総括的研究会を開く予定である。研究成果は以下のとおりである。

⑵研究成果の公表

①ひょうご歴史文化フォーラムの開催「前期赤松氏の実像―城郭と寺院から―」

□令和四年一〇月一六日（日曜日）

□県立西播磨文化会館

・県立歴史歴史博物館、同ひょうご歴史研究室主催。兵庫県、兵庫県教育委員会が後援。

・参加者は一五七名

□基調講演

・大村拓生（歴史研究推進員）「前期赤松氏の展開と禅宗寺院」

・山上雅弘（共同研究員）「前期赤松氏の城郭と拠点形成」

□パネルディスカッション

基調講演の後、島田拓共同研究員（上郡町教育委員会）、義則敏彦共同研究員（たつの市教育委員会）、新谷

和之近畿大学准教授も登壇し、パネルディスカッションをおこなった。

上郡町の赤松居館跡から出土した土師器（はじき）の用途、古代と中世の山城の「石垣」築造の違い、西播磨の禅宗寺院と京都五山との関係、禅宗寺院の統合機能と分裂機能の問題、播磨守護の赤松氏と近江守護の六角氏の地域支配との比較検討、文献史学と考古学の共同研究の果たした役割の意義などが話し合われた（司会は中井淳史共同研究員と古野貢客員研究員）。七年間の研究を締めくくるに相応しい、有意義なフォーラムになった。フォーラム開催にあたっては、兵庫県西播磨県民局の全面協力を得た。

②本誌での論文執筆

本誌第八号は、当班の調査研究の区切り、研究成果の集大成の場として位置づけ、「赤松氏と山城研究」という特集を組んだ。班のメンバー全員が何らかの形で執筆に関わり、合わせて一三編の論考を掲載できた。

また藤木透共同研究員が属する佐用町教育委員会からは、浅野博之教育長に「史跡利神城跡」の保全・活用に関するご論考をお寄せいただいた。

三、たたら製鉄研究班

⑴体制と研究方針

本年度の当班は、メンバーの異動があった。笠井今日子・小川弦太の両氏が退任し、新たに松井良祐氏が加わり、合わせて九名で構成された。

また昨年度までの研究方針を改め、「宍粟市と共同して、考古部門と文献調査部門の基礎的研究をすすめるとともに、その成果にもとづき、令和五年度以降に県民向けの『たたら製鉄解説書』（仮）の刊行をめざす」とした。

このうち小冊子の刊行は、令和六年度に館内で開催される特別展示会と連動することも決められた。

当班の研究会は現時点で合わせて二回開催し、令和五年三月に三回目の研究会をおこなう予定である。研究成果は、つぎのとおりである

⑵研究成果の公表

①西播磨県民局編『たたらのふるさと西播磨』の改訂版作りの協力

兵庫県西播磨県民局県民交流室地域づくり課からの依頼を受け、当班のメンバーが、古代から現在に至る「千種鉄」や製鉄に関する歴史を概観できる、小冊子の改訂版作りに協力した。

令和四年三月、同県民局からＡ４版一五頁立て、オールカラーで一万部刊行された（写真参照）。

②航空レーザー測量による遺跡分布調査研究の進展

昨年度から、たたら製鉄遺跡を調査発見する方法の一つとして「航空レーザー測量」の成果を活かすことを決めた。その成果にもとづき、令和四年一二月七日、赤松氏と山城研究班の永恵裕和共同研究員の協力のもと、宍粟市の奥天児屋遺跡の周辺の現地調査を実施した。

その結果、新たな製鉄遺構を発見するなどの成果を挙げた。この内容については、前述の小冊子に反映させる予定である。

③古代鍛冶技術の地域間交流に関連する調査研究の進捗

当班では一昨年度から島根県古代文化センターや岡山県教育委員会とともに大阪府交野市教育委員会との連携を深めている。

その一環として、第二回研究会（一一月二〇日）で、交野市教育委員会の真鍋成史氏が、『播磨国風土記』揖保郡枚方里条にみえる「枚方の漢人（あやひと）」に関する報告をおこなった。

その結果、古代播磨の鍛冶遺跡において、渡来系の鍛冶技術の影響が及び、さらにその前提には、河内の肩野（かたの）物部氏が介在した可能性が明らかになった。この成果については、来年度の『研究室紀要』に反映される予定である。

四、「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト

○報告書『「鳴門の渦潮」と淡路島の文化遺産』の刊行

昨年度以来の個別の調査研究、および本年度の二回の研究会を踏まえ、令和五年二月末日、三年間のプロジェ

クト成果を集大成する『「鳴門の渦潮」と淡路島の文化遺産』を刊行する予定である（A4版横書き。全一七二頁。カラー図版を含む）。

本報告書は、兵庫・徳島「鳴門の渦潮」世界遺産登録推進協議会、「鳴門の渦潮」世界遺産登録学術調査委員会、淡路島日本遺産委員会、淡路県民局などのほか、県内各地の自治体の文化財課、図書館、連携する研究組織や研究者などに配布し、また研究室のホームページにもアップする予定である。本報告書の目次は170頁を参照のこと。

五、研究室ホームページ

研究室では平成二七年の秋、情報発信ツールの一つとして、ホームページを独立して開設した。しかし昨年度から博物館全体のホームページに統合して運用し始めた。催し物の案内のほか、三つの研究班の調査活動や研究成果を取り上げている。

また本年度内に、『播磨国風土記』と赤松氏と山城研究班の研究成果を載せる新たなコーナーを開設する予定である。

六、今後の方向性

ひょうご歴史研究室は開設以来、まもなく九年目を迎えようとしている。『播磨国風土記』研究班は、書籍の刊行を成果の一つとして、昨年度末で発展的解消となり、また赤松氏の山城研究班も本年度末で一区切りする予定となった。残されたメンバーの間では、県民の期待や意向に如何に答えるか、また博学連携をどう進めるかなど、さまざまな議論を重ねていく予定である。

（以上、文責は坂江渉）

『「鳴門の渦潮」と淡路島の文化遺産』
目　次

刊行にあたって・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・藪田　貫・・・・　1

本文編

「国生み」神話と鳴門の渦潮　－淡路の海人の祭祀習俗－・・・・・坂江　渉・・・・　7

国家形成期における淡路と阿波・・・・・・・・・・・・・・・・・・・古市　晃・・・・ 17

源平合戦と淡路国の武士・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・福家清司・・・・ 29

中世淡路島南部をめぐる海域世界と交通・・・・・・・・・・・・・・大村拓生・・・・ 39
（補論）羽柴秀長の鳴門海峡渡海と渦潮

阿波・淡路の水軍と城郭（海城）・・・・・・・・・・・・・・・・・・山上雅弘・・・・ 51

「福良古事記」と鳴門海峡地域・・・・・・・・・・・・・・・・・・・木村修二・・・・ 67

漁具・漁労技術と漁民の移動性
　－兵庫県南あわじ市沼島を中心にして－・・・・・・・・・・・・磯本宏紀・・・・ 94

「鳴門の渦潮」周辺の歴史的世界
　－「淡路国分間絵図」の活用に向けて－・・・・・・・・・・・・藪田　貫・・・・104

資料編

えびす関連記述一覧と解題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・117
「淡路国分間絵図」一覧と解題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・132
鳴門海峡周辺関連年表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・138

別編

「鳴門の渦潮」発生メカニズムの解明（Ⅰ）
　－渦潮の動態実測調査による渦規模の定量的評価・・・・・・上嶋英機・・・・147

「鳴門の渦潮」発生メカニズムの解明（Ⅱ）
　－水理模型実験による海峡地形と渦潮の関係性の検証・・・・上嶋英機・・・・153

淡路島の地形と地質
　－砂嘴・砂州の形成と神話との関わりの背景・・・・・・・・加藤茂弘・・・・159

主催：公益財団法人 兵庫県芸術文化協会
共催：兵庫県立歴史博物館 ひょうご歴史研究室

ふるさとの歴史講座 神戸校

『風土記』からみる古代の歴史

713年の朝廷の命を受け、諸国国司らが作成した公文書を『風土記』といいます。この講座では現存する『風土記』のうち、『播磨国風土記』のほか出雲・豊後・常陸などの史料も用い、『風土記』の魅力や興味深い神話・伝承を紹介します。とくに後半の講座では、『風土記』の動植物をめぐる地域生活誌を扱います。

【会　場】兵庫県民会館３階３０３号室
　　※7月１１日は１０階福の間
【時　間】午後２時から３時30分まで（月曜日）
【年間受講料】一般：１７,０００円　　※友の会会員：１３,０００円
　　※県立美術館「芸術の館　友の会」、県立歴史博物館友の会会員も対象
【日程等】

	実　施　日/会　場	講　　座　　内　　容	講　師
①	４月11日(月) 兵庫県民会館３階３０３号室	『風土記』とはなにか	ひょうご歴史研究室 研究コーディネーター **坂江　渉**
②	５月16日(月) 兵庫県民会館３階３０３号室	『播磨風土記』の特徴と魅力	ひょうご歴史研究室 研究コーディネーター **坂江　渉**
③	６月13日(月) 兵庫県民会館３階３０３号室	播磨の志深ミヤケの物語 -史書を読み比べる-	ひょうご歴史研究室客員研究員 (神戸大学文学部教授) **古市　晃**
④	７月11日(月) 兵庫県民会館１０階福の間	国名ハリマの由来	ひょうご歴史研究室客員研究員 (神戸大学文学部教授) **古市　晃**
⑤	９月５日(月)※ 9月12日から変更 兵庫県民会館３階３０３号室	丹後と播磨の天橋立伝承	ひょうご歴史研究室 研究コーディネーター **坂江　渉**
⑥	１０月3日(月) 兵庫県民会館３階３０３号室	『風土記』の白鳥伝説を追う	ひょうご歴史研究室客員研究員 (神戸大学文学部教授) **古市　晃**
⑦	１１月7日(月) 兵庫県民会館３階３０３号室	柏の葉の呪術	立命館大学非常勤講師 **髙橋　明裕**
⑧	１２月5日(月) 兵庫県民会館３階３０３号室	猟犬伝承とミヤケ	神戸大学地域連携推進本部 特命准教授 **松下　正和**
⑨	１月16日(月) 兵庫県民会館３階３０３号室	シカと田植えの儀式	立命館大学非常勤講師 **髙橋　明裕**
⑩	２月13日(月) 兵庫県民会館３階３０３号室	古代の海人とウミガメ	ひょうご歴史研究室 研究コーディネーター **坂江　渉**

※ 都合により、日程、会場、講師、内容が変更する場合があります。ご了承ください。

【問い合せ】　公益財団法人 兵庫県芸術文化協会
〒650-0011　神戸市中央区下山手通４－１６－３
ＴＥＬ（０７８）３２１－２００２
ＦＡＸ（０７８）３２１－２１３９
e-mail：sinkoubu@hyogo-arts.or.jp

令和３年度（承前）～令和４年度
「ひょうご歴史研究室」現地調査等一覧

『播磨国風土記』研究班

	日付	場所	内容	人数	備考
①	１／29(日)	現地調査	上村池遺跡(加古川市)、愛宕山古墳(三木市)	1	現地説明会と現地調査

大阪湾岸と淡路の地域紙研究班

	日付	場所	報告等	人数	備考
①	５／27(金)	資料調査	大阪府立狭山池博物館、大阪狭山市立郷土資料館	1	展示資料の熟覧調査
②	７／１(金)	現地調査	太子町立歴史資料館、吉福西遺跡	1	資料調査と現地調査
③	７／９(土)	資料調査	葛城市歴史博物館	1	資料の実見
④	９／２(金)	資料調査	小野市立好古館、福谷村資料館他	1	資料調査と現地調査
⑤	10／８(土)	資料調査	堺市博物館、大阪市立自然史博物館	1	展示資料の熟覧調査
⑥	11／13(日)	現地調査	津門大塚町遺跡（西宮市）	2	遺物実見
⑦	12／９(金)	資料調査	大阪府立近つ飛鳥博物館	1	展示資料の熟覧調査

赤松氏と山城研究班

	日付	場所	報告等	人数	備考
	２／17(木)	現地調査	性海寺、住吉神社、春日神社他（神戸市西区）	1	史跡調査
①	４／28(木)	現地調査	了源寺（太子町）、武大神社（姫路市）、梶山城（たつの市）他	2	史跡調査
②	６／23(木)	現地調査	山崎八幡宮、篠ノ丸城跡、山崎歴史郷土館他	1	遺跡の巡見と資料調査
③	10／６(木)	現地調査	興善寺、安楽寺他（姫路市）、梅岳寺、宮内天満神社（たつの市）	1	遺跡の巡見と立地の確認
④	11／18(金)	現地調査	上郡町郷土資料館	4	出土遺物の熟覧調査
⑤	12／８(木)	現地調査	安国寺、掎鹿寺、黒谷若宮八幡宮他（加東市）	1	遺跡の巡見
⑥	１／12(木)	資料調査	関西大学総合図書館（大阪府吹田市）	1	文献の確認調査

たたら製鉄研究班

	日付	場所	報告等	人数	備考
	３／16(水)	資料調査	高砂市教育委員会文化財係資料調査室	7	資料調査と撮影
①	６／１(水)	現地調査	波賀森林鉄道廃線跡	6	現地調査と撮影
②	12／７(水)	現地調査	天児屋鉄山跡	5	遺構等の踏査と撮影

令和３年度（承前）～令和４年度
「ひょうご歴史研究室」研究会一覧（敬称略）

コア会議

	日付	場所	内容	人数	備考
①	５／８(日)	ハイブリッド形式	令和３年度の活動実績と令和４年度の方針・体制案について	15	
②	12／17(日)	ハイブリッド形式	令和４年度の事業と令和５年度以降の事業の方向性等について	14	

大阪湾岸と淡路の地域史研究班

	日付	場所	報告等	人数	備考
①	５／22(日)	ハイブリッド形式	・各委員報告 「今後の研究の方向性や構想案について」	20	
②	11／20(日)	ハイブリッド形式	・平石　充（島根県古代文化センター主席研究員） 「古代出雲の鳥取部について」	20	

赤松氏と山城研究班

	日付	場所	報告等	人数	備考
①	５／８(日)	ハイブリッド形式	・大村論文合評会 古野　貢「大村論文合評　幕府―守護体制」 田村正孝「大村拓生氏の赤松関係論文の検討―寺社編―」 山上雅弘「大村論文について　赤松山城班の成果と課題」	18	
②	９／24(土)	ハイブリッド形式	・ひょうご歴史文化フォーラム（10／16）についての打合せ	19	

たたら製鉄研究班

	日付	場所	報告等	人数	備考
①	６／18(土)	ハイブリッド形式	・田路正幸「宍粟市千種町西河内地区の製鉄遺跡の分布状況について」 ・土佐雅彦「入江家文書にみる鉄山関係史料についての中間報告」	19	
②	11／20(日)	ハイブリッド形式	・真鍋成史「『播磨国風土記』揖保郡枚方里漢人考―鉄器生産との関係から―」	22	

「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト

	日付	場所	報告等	人数	備考
①	７／23(土)	淡路県民局	自然部会との研究交流会	17	
②	９／17(土) ～18(日)	淡路県民局	第４回合同研究会	14	

令和4年度　ひょうご歴史研究室構成メンバー一覧

（敬称略）

【ひょうご歴史研究室コア会議メンバー】（13名）

室　長	藪田　貫	兵庫県立歴史博物館　館長
副室長	神足孝明	兵庫県立歴史博物館　次長
参　与	中元孝迪	播磨学研究所名誉所長、兵庫県立大学特任教授
顧　問	山下史朗	兵庫県企画部地域振興課　歴史資源活用専門官
顧　問	大国正美	神戸新聞社　常務取締役［7年目から］
研究コーディネーター	坂江　渉	兵庫県立歴史博物館　ひょうご歴史研究室
歴史研究推進員	大村拓生	兵庫県立歴史博物館　ひょうご歴史研究室
共同研究員	大谷輝彦	姫路市埋蔵文化財センター　館長［2年目から］
共同研究員	山上雅弘	前兵庫県まちづくり技術センター　技術専門員
協力研究員	村上泰樹	元兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部　次長
研究員	中村　弘	兵庫県立考古博物館　館長補佐兼企画広報課長［4年目から］
県教委事務局	甲斐昭光	兵庫県教育委員会事務局文化財課　課長
県教委事務局	柏原正民	兵庫県教育委員会事務局文化財課　副課長兼文化財班長

【大阪湾岸と淡路の地域史研究班】（8名）

◎ 研究コーディネーター	坂江　渉	再掲
客員研究員	古市　晃	神戸大学大学院人文学研究科　教授
共同研究員	伊藤宏幸	淡路市教育委員会社会教育課［5年目から］
☆ 共同研究員	金田匡史	洲本市教育委員会生涯学習課　文化振興係長兼淡路文化史料館長
☆ 共同研究員	定松佳重	南あわじ市教育委員会埋蔵文化財調査事務所　主任
研究員	池田征弘	兵庫県立考古博物館 学芸課長［7年目から］
研究員	神戸佳文	兵庫県立歴史博物館　社会教育推進専門員
県教委事務局	大本朋弥	兵庫県教育委員会事務局文化財課　主任

【赤松氏と山城研究班】（12名）

◎ 共同研究員	山上雅弘	再掲
客員研究員	古野　貢	武庫川女子大学共通教育部共通教育科　教授［7年目から］
共同研究員	田村正孝	大手前大学史学研究所　研究員［3年目から］
共同研究員	中井淳史	兵庫県立大学地域資源マネジメント研究科　教授［4年目から］
共同研究員	藤木　透	佐用町教育委員会教育課企画総務室　副室長
共同研究員	大谷輝彦	再掲
共同研究員	島田　拓	上郡町教育委員会生涯学習課総務・文化財係　係長［2年目から］
共同研究員	義則敏彦	たつの市教育委員会歴史文化財課　専門員［6年目から］
研究員	永惠裕和	兵庫県立考古博物館　主査［3年目から］
研究員	竹内　信	兵庫県立歴史博物館　学芸員［6年目から］
歴史研究推進員	大村拓生	再掲
県教委事務局	柏原正民	再掲

【たたら製鉄研究班】（9名）

◎ 協力研究員	村上泰樹	再掲
客員研究員	岩城卓二	京都大学人文科学研究所　教授［4年目から］
客員研究員	土佐雅彦	前兵庫県立篠山東雲高等学校教諭［3年目から］
☆ 共同研究員	松井良祐	稲美町教育委員会　町史編纂専門員
共同研究員	伏谷　聡	兵庫県総務部法務文書課　会計年度任用職員
共同研究員	田路正幸	宍粟市教育委員会社会教育文化財課　専門員
研究員	藤田　淳	兵庫県立考古博物館　社会教育推進専門員
研究員	吉原大志	兵庫県立歴史博物館　主任［4年目から］
県教委事務局	柏原正民	再掲
県政推進員	長澤喜史	兵庫県立歴史博物館　ひょうご歴史研究室

※　☆新メンバー、◎リーダー

【「淡路島と鳴門の渦潮」調査研究チーム】

座長	藪田　貫	ひょうご歴史研究室　室長
委員	坂江　渉	ひょうご歴史研究室　研究コーディネーター
委員	古市　晃	ひょうご歴史研究室　客員研究員
委員	大村拓生	ひょうご歴史研究室　歴史研究推進員
委員	山上雅弘	ひょうご歴史研究室　共同研究員
委員	木村修二	神戸大学大学院人文学研究科　特命講師
委員	福家清司	徳島県埋蔵文化財センター　理事長
委員	磯本宏紀	徳島県立博物館　学芸員
オブザーバー	山下史朗	兵庫県企画部地域振興課　歴史資源活用専門官

「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト実行委員会

臨時職員	福永明子	

「ひょうご歴史研究室」設置要綱

（設　置）

第１条　兵庫県内の地域の歴史の調査・研究を通じ、県民の郷土の歴史に関する理解をさらに深め、教育、学術及び「ふるさと意識」に根ざしたひょうごの文化の継承・発展に資するため「ひょうご歴史研究室」(以下「研究室」という。) を置く。

（場　所）

第２条　研究室の設置場所は兵庫県立歴史博物館内とする。

（所掌事務）

第３条　研究室は次に掲げる兵庫県の歴史研究に関する業務を行う。

⑴兵庫県内の歴史に関する調査・研究に関すること。
⑵調査・研究成果の普及に関すること。
⑶調査・研究成果の活用に関すること。
⑷その他兵庫県の歴史研究に関すること。

（組　織）

第４条　兵庫県立歴史博物館長の下に研究室の室長、副室長及びその他所要の職員を置く。

２　室長は兵庫県立歴史博物館長を、副室長は兵庫県立歴史博物館の次長をもって充てる。

（庶　務）

第５条　研究室の運営に係る庶務は兵庫県立歴史博物館において処理する。

（補　則）

第６条　この要綱に定めるもののほか、研究室の運営に関して必要な事項は別に定める。

附　則

この要綱は、平成27年４月１日から施行する。

執筆者紹介

・藪田　貫（やぶた・ゆたか）
ひょうご歴史研究室長
・大村　拓生（おおむら・たくお）
ひょうご歴史研究室歴史研究推進員
・山上　雅弘（やまがみ・まさひろ）
ひょうご歴史研究室共同研究員
・古野　貢（ふるの・みつぎ）
ひょうご歴史研究室客員研究員
・新谷　和之（しんや・かずゆき）
近畿大学文芸学部准教授
・島田　拓（しまだ・ひろし）
ひょうご歴史研究室共同研究員
・中井　淳史（なかい・あつし）
ひょうご歴史研究室共同研究員
・永惠　裕和（ながえ・ひろかず）
ひょうご歴史研究室研究員
・田村　正孝（たむら・まさたか）
ひょうご歴史研究室共同研究員
・浅野　博之（あさの・ひろゆき）
佐用町教育長
・義則　敏彦（よしのり・としひこ）
ひょうご歴史研究室共同研究員
・大谷　輝彦（おおたに・てるひこ）
ひょうご歴史研究室共同研究員
・竹内　信（たけうち・まこと）
ひょうご歴史研究室研究員

編集後記

紀要第八号として特集「赤松氏と山城研究」をお届けします。「刊行にあたって」でも、述べられているように、これをもって歴史研究室赤松氏と山城研究班は解散することになりました。これまでご協力いただいた方々に感謝申し上げます。

またそれに伴い、大村も研究室職員からは離れることになり、第三号から続けてきた編集後記の執筆も最後になります。どれだけ貢献できたか忸怩たる想いですが、これまでのご厚情に篤く御礼申し上げます。

なお研究室は次年度も新たな体制のもとで活動していきますので、今後とも一層のお引き立てをお願い申し上げます。

（大村拓生）

ひょうご歴史研究室紀要　第八号

令和五年（二〇二三）三月二八日発行
編集・発行　兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室
（編集担当・坂江渉、大村拓生、長澤喜史）
〒六七〇-〇〇一二　兵庫県姫路市本町六八番地
電話　〇七九-二八八-九〇一一
HP　https://rekihaku.pref.hyogo.lg.jp/laboratory/
印　刷　合名会社　柳生印刷所
〒六七一-一五六一　兵庫県揖保郡太子町鵤五六八
電話　〇七九-二七六-〇〇四八